みなと元町タウンニュース TOWN NEWS No.336

発　行:みなと元町タウン協議会　住　所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内　発行人:奈良山喬一　編集人:岩田照彦　電話・FAX:078−391−0831

2040年、道路の景色が変わる　～人々の幸せにつながる道路～

合資会社ゼンクリエイト　根津　昌彦

令和2年6月5日に国道交通省道路局長より、「新型コロナウイルス感染症の影響に対応するための沿道飲食店等の路上利用に伴う道路占用の取扱いについて」という通知が各地方整備局から各地方公共団体へ届いた。早速神戸市では、都心界隈で活動を行っているまちづくり協議会や商店街組織へ連絡し、神戸元町商店街にいても、商店街連合会事業部会が中心となって、すぐにこの暫定措置に取り組むことになった。

7月17日（金）以降、元町商店街内で、左の写真の立て看板とともに、テーブル、椅子、パラソルが路上に置かれている光景を、多くの人が目にしていることであろう。

そもそもこの暫定措置の目的は、飲食店等が「３密」の回避によって店内での客席数確保が制限される中、「新しい生活様式」の定着に対応する手法として、テイクアウトやテラス営業等を行うための路上での仮設施設の設置の基準を緩和し、施設付近の清掃等に協力いただくなどして、地方公共団体と地域住民・団体等が一体となって、この厳しい局面を乗り切ろうとするものである。

今回の暫定措置の発表から遅れること2週間後に、国道交通省は社会資本整備審議会道路分科会基本政策部会の提言として、道路政策ビジョン「2040年、道路の景色が変わる」を公表した。ビジョンの前文には、「ポストコロナの新しい生活様式や社会経済の変革も見据えながら、概ね２０年後の日本社会を念頭に、道路政策を通じて実現を目指す社会像、その実現に向けた中長期的な政策の方向性を提案するものである。本ビジョンが、ポストコロナの社会変革も含め、中長期的に我が国が目指す社会についての議論のベースとなり、その実現に向け、既成概念にとらわれない自由な発想で道路政策が検討・展開されることを期待する。」とある。ここで描かれている20年後の姿とは、どういったものであるかをご紹介しよう。

このビジョンで掲げられたキーワードは「進化」と「回帰」。このうち、回帰とは次のようなことが謳われている。

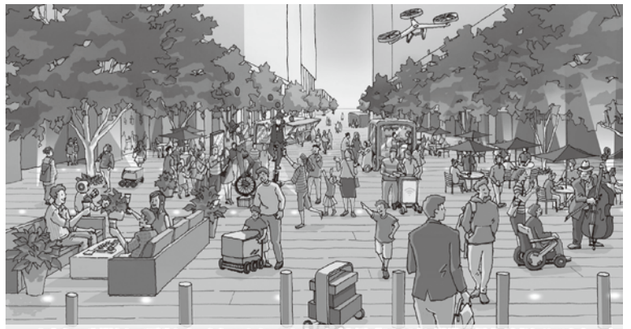
【道路は、ライフラインの収容、防災や環境保全、市街地の形成、景観の形成、コミュニティの形成等のための空間を提供する。特に、道路は古来より、人々の交流やコミュニケーションを育む場であった。子供たちが遊んだり、大人が立ち話や井戸端会議を行う光景が、かつては至るところで見られたものの、モータリゼーションにより失われてしまった。

（中略）更に、新型コロナウイルス感染症の拡大により、移動や交流が制限されるなか、私たちは対面でのコミュニケーションの普遍的な価値を再確認した。私たちの「幸せ」には、他者との「交流」が重要な意味を持つのである。

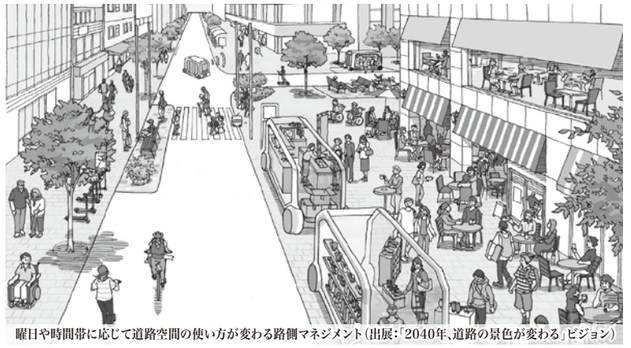
私たちの「幸せ」の実現について改めて考えたとき、道路を人々が滞在し交流できる空間に「回帰」させることも、現代において求められるのではないか。】

まさに、今回の暫定措置は、「2040年、道路の景色が変わる」で描かれたこの「回帰」の姿を、広く市民に認知させるための手段なのだ。元町商店街においては、すでに道路管理・活用協定によって、路上へのベンチ設置や水曜市、ワインアベニューなど、道路空間をコミュニティやアメニティの場として、利用してきた。11月30日までの「テイクアウトやテラス営業などのための路上利用」は、さらにこの動きを加速させることにつながるものといえるだろう。

緊急事態宣言が解除され、2ヶ月が経過した。商店街には、コロナ前の人の流れが戻ってきているようにも思える。しかし、まだまだそれぞれの商店が置かれている状況は厳しいと聞く。こうした道路空間の積極的な活用によって、対面でのコミュニケーションを求めて、「行きたくなる、居たくなる道路」としての商店街の復権につなげていくため、今後も様々な取り組みにチャレンジしていきたい。



人中心の空間として再生した、まちのメインストリート（出展:「2040年、道路の景色が変わる」ビジョン）



曜日や時間帯に応じて道路空間の使い方が変わる路側マネジメント（出展:「2040年、道路の景色が変わる」ビジョン）

企業会員紹介⑦

みよしアートプランニング

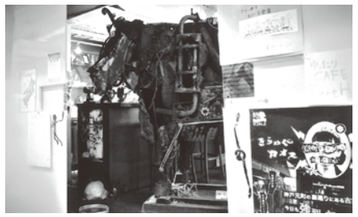
代表 宮崎みよし

主宰するみよしアートプランニングが西元町に事務所を構えたのは阪神淡路大震災後まもなくで、神戸高速鉄道西元町駅西コンコースと元町商店街に繋がっている地下街の一室でした。6town食味街と称した食堂街で三越があった頃は三越の地下とも繋がっていたのでとても繁盛していたとか。その頃の残像が感じられ、なかなか趣がありました。そこで何をしたのか。食堂でなく、食味街をアート街に。アートを展示し鑑賞する為に造られた美術館や画廊の様な場でなく街の中に展開させることで展示された場もアート作品も共に蘇るのではという考えから、1993年にみよしアートプランニングを設立し、強化策としてNPO リ・フォープを立ち上げ、六甲アイランド南端遊歩道での野外展をはじめ、街のあちこちの空間で展覧会を展開してきました。

歴史感あるハーバーロードに面した神戸高速西元町駅のコンコースは、よく観察すると大理石風の円柱が並んでいるシャレた広場で、神戸高速鉄道様にお願いして色々整備して頂き、学生達に壁画制作をしてもらいアーティスト達とはアーツ市等を開催させていただきました。じわじわと元町6丁目商店街周辺の街の面白さが解り、西元町周辺「まち」おさらい講座やまち歩き、おもてなしマップ制作など色々イベントを企画実行しました。

街に何かが潜んでいる様な空間があれば美術展を開催し、そこに潜んでいる女神様と出会えるとニンマリとして楽しんでいます。展示された作品は、街中の展示空間から水を得た生き物のように生き生きとし、場である街の魅力を提供し鑑賞者に楽しんでもらっています。こんな贅沢なことをあちこちで展開していると、宇治川商店街からフラリとJR元町高架下を歩いていたら、終戦後からの奇妙な怪物が手招きをするのです。どんな怪物かをモトコー2のプラネットEartH（ギャラリー&喫茶）で探索中です。

まだまだ元町周辺には開港以来の神戸らしい街の魅力が潜んでいます。アート作品を通じて多くの人たちと発掘探検の旅を。



モトコー2のプラネットEartH（ギャラリー&喫茶）

神戸元町商店街 楽市楽座情報 8月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー（無料）　TEL361−4523

7月30日(木)～8月4日(火)チェリーの会展
8月6日(木)～8月11日(火)申込受付中
8月13日(木)～8月18日(火)赤窓会
8月20日(木)～8月25日(火)
兵庫倶楽部 写友会 写真展
8月27日(木)～9月1日(火)半切以下書道作品

◇元町映画館（有料）　TEL366−2636

8月1日(土)～8月7日(金)
『東京裁判』・『アングスト／不安』
8月8日(土)～8月14日(金)
『蟻の兵隊』・『東京の恋人』
「生誕100年記念 異端の天才 キム・ギヨン」
8月8日(土)～8月28日(金)『れいこいるか』
8月15日(土)～8月21日(金)
『ゆきゆきて、神軍』・『まわる映写機 めぐる人生』
『三大怪獣グルメ』
8月22日(土)～8月28日(金)
『あなたの顔』・『ドンテンタウン』
『眉村ちあきのすべて（仮）』
『8日で死んだ怪獣の12日の物語』
8月22日(土)～9月4日(金)『精神0』

読者プレゼント

展覧会鑑賞ご希望の方は、はがきに住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着１０組の方に招待券をお送りします。

☆夏季特別展
シルバニアファミリー展

ハウス(初代) 1985年© EPOCH

場所：明石市立文化博物館
TEL078−918−5400
期間：7月18日(土)～8月30日(日)

……クリーン作戦レポート……

新型コロナウイルスの影響で、密集状態を避けるための措置として見送ってきたクリーン作戦も7月1日（水）、もとまちハーバー懇談会を母体とする神戸駅東地区クリーンチームが、久しぶりに再開した。クリーン作戦はエスタシオン・デ・神戸（１６名）、ネッツトヨタ兵庫㈱（２５名）、あいあいネット神戸（２名）が3チームに分かれ、元町通７丁目を含む懇談会地域一帯のクリーン作戦を実施した。

ネッツトヨタ㈱＋元町通７丁目チーム

エスタシオン・デ・神戸チーム

栄町通クリーン作戦

※栄町通まちづくり委員会のクリーン作戦は7月10日（金）に実施予定でしたが、雨で中止になりました。

編集後記

地域活性化事業の一環として、乙仲通活性化のため助成金を得たのを機に、地元で印刷業を営む道上順一さんに、はじめての地図作成をお願いした。これを機に同氏は、神戸市など関係機関と提携、地元での組織化にもつとめ、マップ例年発行のほか音楽祭開催などにも挑戦、協議会の乙仲通代表として活躍されてきたが、近年は体調不良で、乙仲通からの撤退を余儀なくされた。その道上さんから乙仲通の情報を得、一級建築士であり神戸松蔭女子学院大学准教授をつとめる米原慶子さんが、地元建築家と建築を志す大学生らと２０１５年から取り組んでこられた成果を、このほど公益社団法人日本建築家協会近畿支部兵庫地域会が「乙仲さんぽ」としてまとめられた。交通の便よく容積率も高い乙仲通、高層化建築に適した潮風と隣り合わせにある地域の将来を見据えた足と知恵が織りなすレポートをお楽しみに。

海という名の本屋が消えた（81）

平野義昌

宇野千代「神戸元町風景」（その1）

〈私と妹とは、ふいにそこへ行ったのであった。神戸とはどんなところか、――長い間に私は人から聞いていたことを心に思い浮べ乍ら、街を歩いた。私たちは誰もこの町に知り合を持たなかったけれども。〉註1
(街、町、原文ママ)

時は1929（昭和4）年、書き手は作家・宇野千代（1897[明治30]～1996[平成8]年）、代表作に『おはん』『色ざんげ』など。77（昭和52）年に中央公論社から全集が出版されている。デザイナー、実業家でもあった。82（昭和57）年、「毎日新聞」に自伝「生きて行く私」を連載、恋と仕事に生きた85年の人生を語った。著名文化人たちが実名で登場する。翌年単行本は100万部を超えるベストセラーになった。

私が千代の神戸随筆を知ったのは全く偶然。図書館で昭和初期の「ブラジル移民」記事を探していて、雑誌「改造」（1930[昭和5]年4月号）広告（写真）を見つけた。河上肇、矢内原忠雄、川端康成、堺利彦、大佛次郎、谷崎潤一郎、小林多喜二などなど、当時の有名学者、社会運動家、文学者たちが執筆する総合雑誌である。軍部が勢力を強め息苦しくなる時代、社会主義者・自由主義者の砦だった。そこに「宇野千代」の名があり、しかも題は「神戸元町風景」。本稿の題材にするつもりでいたが、コロナウイルス感染対策で図書館が休館になっていた。6月16日から読書相談その他サービスが再開され、書庫を探してもらい、ようやく読むことができた。

本題の前に千代のプロフィールを紹介しておく。山口県玖珂（くが）郡横山村（現岩国市）生まれ。1917（大正6）年、恋人（東京帝大生）と上京。出版社の事務、家庭教師、雑誌のグラビアモデルなどの職業で生活を支えた。東大近くのレストラン給仕勤め（女給ではない）で文壇人の知遇を得る。中央公論編集長・瀧田樗蔭（たきたちょいん）は食事代に加えて毎回千代に祝儀50銭を置いて帰った。千代はそのお金で質屋に入れた品物を請け出せた。18日間で店を辞めた。

瀧田は、著名作家の芥川龍之介、久米正雄、まだ無名の今東光を連れて来た。芥川は千代をモデルに小説「葱」を書いている。

〈……何しろ色が白くって、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いていても、兎に角一通りの美人である。それが髪をまん中から割って、忘れな草の簪をさして、白いエプロンをかけて、自働ピアノの間に立っている所は、とんと竹久夢二君の画中の人物が抜け出したようだ。（後略）〉註2

「葱」の女性は美人で、よく気がついて、教養がある。美青年・田中（今東光らしい）が彼女を家まで送る。恋の予感が漂うが、途中彼女は八百屋で一束四銭の葱（千代の本では散歩、葱は2銭）を二束買う。

〈……実生活の如く辛辣な、眼に滲む如き葱の匂が実際田中君の鼻を打った。〉註2

芥川は千代の生活感を察している。

19（大正8）年、千代は恋人と結婚し、彼の就職先・札幌に転居。21（大正10）年、「時事新報」懸賞小説に「脂粉の顔」（筆名・藤村千代）を応募、1等入選した。22（大正11）年、瀧田の「中央公論」に短篇を投稿した。自信作なので瀧田から連絡なく、談判のため上京した。次号に掲載が決まっていた。多額の原稿料を受け取り、その足で故郷に里帰りした。札幌に戻る途中東京で下車し、再び中央公論社に行く。評論家に尾崎士郎（先の懸賞で2等）を紹介され、恋に落ち、そのまま同棲。23（大正12）年、短篇集『脂粉の顔』を改造社から出版。二人の住まいは東京府馬込町、川端康成、萩原朔太郎、広津和郎、三好達治、室生犀星らが集う通称「馬込文士村」。24（大正13）年、夫と離婚が成立し、尾崎と結婚。27（昭和2）年、夫婦は川端に誘われ伊豆に旅行、千代は結核療養中の梶井基次郎と知り合い、交際が噂になる。28（昭和3）年、梶井が上京して夫婦関係は崩壊する。29（昭和4）年、『新選宇野千代集』（改造社）出版。この年、馬込村で大事件が起きた。ファッションリーダー・千代に影響されて、川端夫人と萩原夫人が洋髪、洋装してダンスに興じて、夫たちも楽しんでいた。萩原夫人がダンス仲間の若い男性と駆け落ちする。

〈髪を切ったことが悲劇の原因になるなどと言うことは、現在では信じられないことである。髪かたちのことくらい、とは言えない。どんなことでも、人のしていないことをするのは異端者である。私が萩原夫人にすすめて髪を切らせた、と言う噂話をそのまま信じ込んだ室生犀星が、私に対して激怒した。〉註3

同29年10月から12月、千代は妹・勝子と神戸に滞在した。尾崎とは別居中だ。千代はこの年末から「報知新聞」に小説を連載する予定。関西を主な舞台にする、その取材のためだ。大阪の生家に戻っていた梶井に相談する。梶井に会うこと自体が目的だったのだろうか。小説の題名「曇粟はなぜ紅い」は梶井が考えたもの。

〈私はしばらくの間、神戸にいて、商家の二階を借り、相変わらず取材を続けていたが、梶井はしばしば、私のところへやって来たものであった。或るときのことであった。「僕が死ぬときには宇野さん、大阪の家へ来てくれますね、僕の枕許で、僕の手を握っていてくれますね」と言ったことがあったが、もちろん、私はそれを冗談だととった。「ええ、好いわよ。手を握っててあげるわよ」と笑いながら答えた記憶がある。神戸は坂道が多い。その坂道に、足をぶっつけるようにして歩いていた梶井の、高い下駄の音が、いまも私に耳に残っている。〉註3

以上が千代「神戸元町風景」当時の身辺事情である。「改造」との縁は深いが、寄稿の経緯は不明だ。この号に関東大震災後の「帝都復興」に関する文章がいくつもあり、浅草案内、銀座・心斎橋比較もある。復興と東西都市比較の意図があったのだろう。

神戸滞在時、千代は短い断髪に黒いマント、勝子は眉の上で揃えた垂れ髪、二人共着物。宿の子に、ナンキン（中国人）みたいや、とからかわれる。異邦人のような姿が違和感ない町だ。元町をモガ・モボが濶歩している。歩いている人の半分が日本人、4分の1が中国人・黒人・アラビア人、あと4分の1は西洋人。千代は「異国の植民地のように」思う。

〈……何となく神戸と言うところは、他人に部屋貸しをしたつましい「しもたや」のようなところではあるまいかと思う。その貸した部屋が、元町を加えた波止場までの居留地一帯の風物なのではあるまいか。そこにはよその人たちが住んでいる。歩いている。笑っている。家主はそのような人たちを、どんな風にして機嫌をとっているか。――その方法が港町の空気の全体なのではあるまいか。〉註1

千代は元町通の東西両端のビルに注目して、この町を分析する。

〈神戸の元町通りは快適なプロムナアドとして有名であるが、その東端を大丸、西端を三越の二大ビルディングでもって終っている。否、始っているのである。それは丁度、気の荒い料理人が逞しい二人の腕で腸詰の棒の両端を抑えているような恰好だ。〉註1

千代は百貨店と小売商店の競合、大規模店による小商店圧迫を問題にしている。「竜骨のようにうねっている街灯は、その対抗策」であり、「商店を護る市民兵」と表現する。「鈴蘭灯」と名付けた商人たちを「可憐な詩人」と呼ぶ。文学者の感性だ。補註

千代は過去に神戸を訪問したのだろうか。イギリス風の建物と町の「古いイギリス風の憂鬱さ」を覚えている様子だ。

〈もともと開港以来の輸入港である神戸の町は、明治当初からイギリスの影響のもとに置かれていたのである。ユニオン・ジャックの旗が、若い男の髭剃りのあとのように美しい青空に、へんぽんと翻っていた昔の居留地の商館。いまもなお、神戸のビジネス・センタアである海岸通りには、イギリス風の古い建物が数多く残っている。木造ペンキ塗り。チムニイのある瓦葺きの屋根。どこから見ても植民地風の構図ではないか。〉註1

アメリカ黒船来航で開港して、港がメリケン波止場と呼ばれても、居留地建設や貿易相手の中心はイギリスだ。しかし、大正末から昭和の時代、国際的覇権はアメリカに移る。

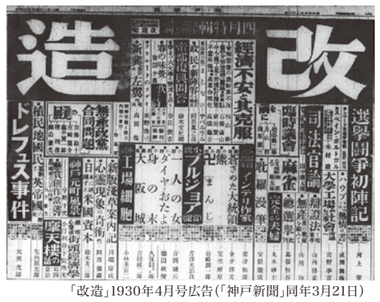
〈元町はこの居留地から、絹の靴下のように長く延びた町であった。新鮮でハイカラな町である反面には、明治初年の銅版画のように、どこか陰鬱な空気が澱んでいる。そうなのだ。私たちの日本が一本立ちの国となり、せっせとこの町の建設をしている間に、古いイギリスは疲れて居眠りを始めたのである。〉註1

国際関係変動は町の風貌にも影響を与えた。

〈……貿易港神戸はアメリカの商品と文明とを孕んだおしゃれな日本娘なのである。アメリカニズムはまづ神戸に上陸して、それから銀座の舗道を踏んだ。〉註1

千代は国際感覚も鋭い。

註1　宇野千代「神戸元町風景」（「改造」1930年4月号、改造社）原文旧字旧かな
註2　芥川龍之介「葱」（『豪華版日本現代文學全集24　芥川龍之介集』講談社、1969年）旧字旧かな
註3　宇野千代『生きて行く私　上・下』毎日新聞社、1983年
補註　「鈴蘭灯」〈（大正末、両デパート進出・移転話により）東西をデパートメントに挟まれて危機感を抱いた元町商人は各丁が互いに手をつないで連携を図る。「横のデパート（商店街）」として1丁目から6丁目がひとつにまとまり、そのために並び立てたのが「すずらん灯」だった。〉（『元町回顧写真集「道」』元町一番街商店街振興組合、2006年）。千代の感性はやはり素晴らしい。



「改造」1930年4月号広告（「神戸新聞」同年3月21日）

乙仲通界隈の魅力と可能性

乙仲さんぽ活動報告 1

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会
乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員会

「乙仲さんぽ」について

私たち日本建築家協会（JIA）は、建築設計やまちづくりなどに取り組む、全国各地の約4,000人の建築家で構成されています。各自の設計活動を通して社会に貢献するだけでなく、会員が連携し、職能を生かしてそれぞれの地域に貢献するような活動を行っています。

JIA近畿支部兵庫地域会では、その一環として乙仲通界隈をフィールドに、地元のみなさまや乙仲通界隈が大好きな学生たちとともに地域・まちづくり支援事業を行ってきました。

特に2015年度からの3ヶ年においては、みなと元町タウン協議会、乙仲通界隈プロジェクト委員会のみなさまにご協力をいただきながら、関西圏の建築・住居系学科で学ぶ学生たちに広く呼びかけ、大学・専門学校等12校から100人を超える学生有志と、延べ40人の建築家が参加し、年度ごとに切り口を変えたデザインワークショップを13回にわたって開催させていただきました。

「乙仲さんぽ」と名づけたこの一連のワークショップは、「地域×学生×建築家」のコラボレーションにより、乙仲通界隈の魅力と課題、そして可能性を考え、発信することで、まちづくりを支援し、また学生たちの実践的な教育に寄与することを目的にしています。

初年度にはまちあるきからはじめ、この界隈の魅力と課題について、5つのテーマを抽出。グループに分かれ、学生たちが主体となり、ディスカッションやさまざまなリサーチ・分析を行い、成果をまとめ、発表会を行いました。

続く2年目には、そのリサーチ結果を踏まえて、コンペ形式のワークショップを行い、具体的な空間デザイン提案を募集。3大学15名の学生たちが作品制作に取り組み、10案の提案作品が提出されました。発表・審査会を経て、乙仲通界隈の2ヶ所の会場で、作品展示会を開催。多くの方にご来場いただきました。

ここでの提案作品は、規模の大きなプロジェクトが多く、すぐに実現に結びつけるのが難しいという反省から、3年目には、より細やかに地元のみなさまのご意見を伺い、それにもとづく現実的な提案を考えることにしました。

3大学から参加した学生たちが4つの混成チームに分かれ、界隈で様々な店舗を営む方々にご協力をいただき、ヒアリングを実施。その結果を分析し、チームごとに4つの現実的な提案作品を制作。発表会も行いました。

この3ヶ年の成果は、年度ごとに冊子にまとめ、地域や大学、建築関係など多方面に配布しました。そして3年間のワークショップを終えた時点で、この活動に関わってきた私たち実行委員会のメンバーが、その成果を振り返り、それぞれの専門的立場からあらためて考察し、今後の展開を検討することにしました。

そしてこの度「乙仲さんぽ2015-2017　地域×学生×建築家　3年間のあしあと」という冊子にまとめて発行。また、このみなと元町タウンニュースでの連載のお話をいただきました。

これから1年間にわたり、学生たちの様々なリサーチや提案と、実行委員会メンバーのコラムをあわせ、ご報告していきたいと思います。

2015 まちあるき・リサーチ

2016 学生作品発表審査会

2017 最終発表会

学生たちと建築家のパワーをまちづくりに！

私は神戸松蔭女子学院大学での空間デザイン教育に携わる中で、学生たちが乙仲通界隈に興味を持ち、研究テーマとしたのをきっかけに、この街に関わるようになりました。

その中で、この街で生まれ育って 60数年、「乙仲通界隈プロジェクト委員会」の事務局長として、界隈のマップづくりやイベント企画、広報に奔走する道上順一氏に出会いました。

界隈の歴史や空間の奥深さなど、様々なことを教わり、多くの魅力とともに空間的課題もあることを知りました。「空間的なことには、まだ取り組めていないので、学生さんたちにぜひ提案してもらいたい。大歓迎です！」との道上さんの言葉に押され、それから学生たちや実行委員会のメンバーとともに、リサーチや様々な空間提案に取り組んできました。

建築家や建築・住居系の学生は、マーケティングや事業採算計画については専門外ですが、空間的には場所の特性や課題を適確にとらえ、改善提案や魅力を高める具体的な計画案を考え、図面や模型、パースなどにより誰にもわかりやすく可能性を示すことができます。

まちづくりにとって、形が見えない状況で話し合っても具体化していくのは難しいですが、こういった形の見える提案を作り、それを検討資料にすれば、格段に意見も出しやすいというのは道上さんの言葉でもあります。

そういった提案は、将来像の共有や合意形成にも大いに役立つと思います。しかし現実には近年、神戸のまちづくりに建築家や学生たちが深く関わる機会は、あまりなかったので、そういった機会を作ろうという思いもあって、このような取り組みをすすめてきました。

このプロジェクトを通し、多くの学生たちがこの街の魅力に惹かれて参加し、期待以上のパワーを発揮して、様々な夢のある提案やすぐにも実現できそうな魅力的な提案を描いてくれました。そして学生たちや建築家のパワーをまちづくりに生かすことが、とても意義深く、大切なことだという確信を持てました。

松蔭のゼミでは、最近は2つのレトロビルのオーナーさんにそれぞれお話を伺いながらリノベーション提案をしたり、様々な機会にこれまでの学生提案作品の展示や紹介を見ていただいたりと、独自の活動も続けています。

コロナ禍の厳しい状況下で、何か少しでもまちづくりのお役に立てるなら、誠に幸いです。

米原 慶子　（よねはら けいこ）
神戸松蔭女子学院大学　人間科学部ファッション・ハウジングデザイン学科准教授／一級建築士・インテリアコーディネーター／Ks Architects・夙川アトリエ主宰